

校長ニューズレター(第24号・1月号) 宜野湾市立長田小学校校長:横山芳春



総合表現をどのように見るの(連載3)

今回は、総合表現の見方です。これまで紹介してきたとおり、総合表現にはあまり話の筋がありません。したがって、“劇”のように筋を追いかけてながら鑑賞すると、総合表現の良さが半減します。

総合表現には、“物語”を朗読や合唱や身体で表現していくように創りかえているものがあります。「おおきなかぶ」「泣いた赤鬼」「三枚のおふだ」「手ぶくろ買いに」などがこれにあたります。新たに創作したものもあります。「子どもの世界だ」「利根川」がそうです。

このような前提をふまえて、どこをご覧になるか、紹介していきましょう。もちろん、鑑賞者独自の見方もおおいに結構です。

- ①子どもたちが心を開いて歌い朗読しているだろうか？
- ②子どもたちの美しさが表現されているだろうか？
- ③どの子どもが主役になっているだろうか？
- ④友だちのうしろに隠れたりせずに、堂々と立っているだろうか？
- ⑤開始から終了まで子どもたちが集中しているだろうか？

こういったことを見ていただき、どこまで子どもたちが育っているかご覧いただけたらと思います。

まだまだ、子どもたちも成長の一段階です。完成はしていませんし、どこまでも無限に成長していくことを願っているのです。完成もないともいえます。

鑑賞で一番大切なことは、子どもたちの努力を認めてあげることだと思います。ここまで成長できたのだというところを、見つけていただきたいと思います。参観後、ご家庭では子どもたちをほめ

てやっていただきたいと思います。子どもたちは、親からほめられるととても嬉しくて、いつまでもほめられたことが心の中に残ります。

子どもたちは、高学年になるほど(思春期を迎えはじめ)、心を閉ざしていきます。私たち教師は、閉ざしがちな心を何とか解放し、子どもたちのみずみずしい姿を引き出したいと努力してきました。ご理解いただけたらと思います。

さてこれから各学年の教材(演目)についてご紹介しましょう。劇のように話の筋はあまりないと紹介しましたが、物語を総合表現に組み直したのものには、もともと筋があります。そのことを踏まえて演目を紹介しましょう。

【1年・おおきなかぶ】

おじいさんが、甘い大きなかぶを作ろうとかぶを植え、とっても大きなかぶができました。色々な人や動物と協力して、やっとかぶを引き抜くおはなしです。

これは、有名なロシア民話です。何度も何度もくり返される「うんとこしょ どっこいしょ」の掛け声。子どもたちは、自然と体を動かしながら、一緒に「うんとこしょ どっこいしょ」と、大きな声でがんばります。犬や猫などおなじみの動物たちが増えるたびに、くり返される言い回しと「うんとこしょ どっこいしょ」の掛け声。この単純なくり返しが、子どもにはとても楽しそうです。

【2年・泣いた赤おに】

浜田廣介作の児童文学がもとです。

とある山の中に、一人の赤鬼が住んでいた。赤鬼はずっと人間と仲良くなりたいと思っていた。そこで、「ここは心のやさしい鬼の家です。どなたでもおいでください。おいしいお菓子がございます。お茶も沸かしてございます。」という立て札を

書き、家の前に立てました。

しかし、人間たちは誰一人として赤鬼の家に遊びに来ることはありません。赤鬼はとても悲しみ、信用してもらえないことをくやしがり、終いには腹を立て、せっかく立てた立て札を引き抜いてしまいます。

ひとり悲しみに暮れていた頃、友だちの青鬼が赤鬼の元を訪ねる。青鬼はある作戦を思いつき実行します。その作戦は成功し、おかげで赤鬼は人間と仲良くなります。だが、赤鬼には一つ気になることがありました。それは、親友である青鬼があれから一度も遊びに来ないことでした・・・

赤鬼くんと青鬼くんの心情を子どもたちがどのように豊に表現できるか、そこが見所です。

【3年・三枚のおふだ】

ある村に、寺があり、そこに、小僧と和尚が住んでいました。

ある日、小僧が山へ栗ひろいに行きたいと駄々をこねます。和尚は仕方なく3枚の札を出すと、小僧に持たせました。

栗拾いに夢中になっているうちに日が暮れる。老婆があらわれ小僧を家に泊めてくれます。だが夜にふと目覚めた小僧は、老婆がやまんばの本性をあらわし小僧を食べる用意をするのを目にします。

小僧が3枚の札を使って寺に逃げ帰り、和尚に助けを求めます。和尚は、トンチをきかして見事に老婆を退治します。

見所は、「小僧と老婆」、「小僧と和尚」、「老婆と和尚」のかけ合いです。子どもたちは練習を重ねるうちに歌唱力もつき、表現にも自信がでてきました。はじめての総合表現、一人一人が主人公になってがんばっています。

【4年・手ぶくろ買いに】

雪の朝、表を走り回って帰ってきた子ぎつねの冷え切った手を握りながら、母さんきつねはてぶくろを買ってやろうと思いつきました。夜になって町に出かける途中で、母さんきつねは子ぎつねの片手を握って人間の子どもの手に変えました。そして子ぎつねに、町の帽子屋へ行って戸を少しだけ開けたら、人間の方の手を出して「手袋をく

ださい」と言うように、と教えました。

——帽子屋は、きつねだなど思ったけれども出されたお金が本物であることを確認すると黙って手袋を渡してやった。子ぎつねは母さんきつねに「人間ってちっとも恐くない」と話しました。母さんきつねはあきれながら、「ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやいて物語は終わります。

子どもたちは、「手ぶくろ買いに」の歌がとっても好きです。見所は、子どもたちがつくりだす美しくみずみずしい歌声と朗読です。

【5年・こどもの世界だ】

「秋のあたたかい日でした」ではじまる、斎藤喜博作のオペレッタ（歌劇）です。太郎という子どもと鳥たち木々たちで協力して、こどもの世界をつくっていきます。

このオペレッタには、素朴で清らかな明るさと、健康で楽しいにぎやかさが流れています。

作者は、「子ども世界だ」の表現をとおして、子どもたちの心を開き、そこに秘められた働き学び喜びや、平和な世界へのあこがれを育てていくことを願っているようです。

【6年・利根川】

日本全国で演じられてき大作です。

悠久の利根川の歴史に人々の生活ドラマを織り込んだ57行の詩を、合唱組曲に編んだものです。一般的に、朗読、独唱、合唱、ハミングなどの多彩な要素で表現します。

作詞者（斎藤喜博）はつぎのように言っています。

「この歌曲は大作であり、歌い終わるのに十数分はかかる。大作にいどみ、大作を仕上げていくことによって、どんな子どもたちが成長していくか、それは体験してみればじめてわかることである。教育の仕事はそういうものであり、子どもが成長していくということもそういうものである。」

6年生は、利根川という大作にチャレンジしています。どのように子どもたちが成長しているのか、思春期特有のはずかしさを克服しているでしょうか、見守って参りましょう。